様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５２０８９５

研究課題名（和文）地方都市再生に向けた歴史地区における公共空間の協育ー地中海都市への地理的視座ー

研究課題名（英文）Co-creation of Public Space in the Historic Centre as a Rehabilitating Process of Local Cities: Geographical Perspectives on the Mediterranean City

研究代表者
竹中　克行（TAKENAKA, Katsuyuki）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：９０３０５５０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，都市形成の核をなした歴史地区が地方都市再生の鍵を握るという発想から，地中海ヨーロッパの中小規模都市に注目し，都市の内と外への求心力をもつ公共空間として歴史地区を育てる試みを分析した。調査フィールドとして，カタルーニャ自治州（スペイン）から規模，立地，生業などの地理的文脈が異なる4都市（タラゴナ，レウス，カンブリルス，ファルセット）を選んだ。
本研究の成果は，歴史都市の空間政策，歴史地区の空間利用，そうした空間利用を維持・促進する仕組みの大きく3つの柱からなる。

研究成果の概要（英文）：The dynamism of the historic centre, where the city was born, is of critical importance for the rehabilitation of local cities. From this point of view, the research project analysed different attempts to co-create the historic centre as an attractive public space for people living both inside and outside the town. To conduct the field research, four cities of Catalan Autonomous Community (Spain) were selected: Tarragona, Reus, Cambrils and Falset. Each one is characterized by a remarkably different geographical context, recognizable in aspects like physical size, location or traditional economic activities. The outcome of the research can be presented according to its three major pillars: spacial planning of historic towns, spacial uses in the historic centre and the mechanisms to maintain and favour such uses.

研究分野：人文地理学

キーワード：都市地理学　公共空間　スペイン　地中海ヨーロッパ

1.　研究開始当初の背景

地方都市の衰退，とくに中心市街地の空洞化が指摘されて久しい。都市の外延的な拡大から脱却し，質的な改善によって持続可能な都市を再構築すべきという考え方は，コンパクトシティの掛け声のもとで，日本でも活発な議論を惹起してきた。歴史的にコンパクトな都市を発達させたヨーロッパに学ぶという視点からは，岡部明子（『サステイナブルシティ―EU の地域･環境戦略』2003 年）らが，都市中心部の社会的な持続可能性を高める地域・都市政策を評価している。

しかし，議論の蓄積とともに事例やノウハウが行政・専門家・実務家の間で共有されるにつれて，各都市に固有の地理的コンテキストを軽視して既知の事業モデルを切り貼りする，薄っぺらな都市開発戦略が目立ち始めた。それらは，スペインの地理学者 F. ムニョスが「俗都市化」という独自の概念を提示して論じたように，ショーケースのごとき商品化された空間を各地に生み出している（『俗都市化―ありふれた景観　グローバルな場所』2013 年）。ヨーロッパ都市の歴史地区も例外ではない。

地方都市の持続可能性の重要な鍵は，中心市街地の再生にある。そこで今必要とされているのは，表面的な修景の対象ではなく，長きにわたる人間活動が蓄積した建造環境として中心市街地の価値を再評価し，それを市民の手垢がついた公共空間として育てることではないか。中心市街地を核とする都市再生については，都市計画・建築計画のほか，地域の運動主体に焦点を当てる環境社会学などの分野で研究蓄積がある。それらに対して，地理学の立場からは，各都市の歴史地区を取り巻く地理的コンテキストを読み解き，それを織り込んだ再生戦略を練り上げる筋道の明確化が求められる。

2.　研究の目的

上記の背景をふまえ，本研究では，中心市街地の公共空間としての価値を高める地方都市の試みに光を当て，事業者・住民を含む多様な主体が参加する広義の政策実践について，都市の内と外に向けて求心力を発する地中海都市の歴史地区をフィールドとして分析することを目的とした。研究に取り組むにあたっては，次の 3 つの柱を組み合わせて目的にアプローチすることにした。第一に，遺産保護政策と都市計画の調整を中心に，歴史都市の空間政策を分析すること。第二に，歴史地区の空間利用について，買物・飲食とイベント・観光の 2 つの活動領域に着目して明らかにすること。そして第三に，公共空間の協育に関する実践に視線を向け，多様な主体の働きかけによって歴史地区の空間利用を維持･促進する仕組みを洞察することである。

すでに述べたように，地理学の立場からの都市再生論では，各都市に固有の地理的条件のもとでコンテキスト化された空間を読み解く視点が不可欠である。そこで本研究では，代表者が研究蓄積を有するスペインのカタルーニャ自治州から，規模，立地，生業などの基本条件を異にするタラゴナ，レウス，カンブリルス，ファルセットの 4 都市を取り上げ，集中的なフィールド調査の対象とした。なお，研究課題名にある「公共空間の協育」という表現は，多様な主体の働きかけによって歴史地区を育てる協働の実践を指している。この表現を採用するにあたっては，井口貢らによる地域再生論（『自律的蘇生と文化政策の役割―教育から協育，「まちづくり」から「まちつむぎ」へ』2011 年）を参考にした。

3.　研究の方法

本研究では，対象 4 都市が置かれた地理的コンテキストの理解がすべての分析の基礎となる。そこで，最初の取組みとして，デスクワークによる取組みが可能な基礎的データの蒐集・分析から，対象都市を性格づけることにした。具体的には，近現代の地形図・市街図にもとづく都市発展過程の把握，地形や交通路を考慮した歴史地区のアクセシビリティの評価，人口分布や施設配置からみた歴史地区の位置づけの検討などである。これらの作業を行いつつ，対象都市でのフィールドワークで得た知見を加えることで，各々の地理的コンテキストに関する理解を深めた。

本研究の主要部分をなす調査・分析は，研究の目的で述べた 3 つの柱から構成される。以下，この枠組みに即して，研究方法の概要を説明する。

(1) 歴史都市の空間政策

歴史都市の空間政策に関する分析は，本研究に先立つ科研費研究課題「歴史地区の環境価値の発見と地方都市の再生戦略―地中海の創造都市への注目―」の実績を下敷きとした。本研究では，県都タラゴナに関して前研究で得た知見を相対化しつつ考察を深めるために，内陸側に隣接する商都レウスを比較対象に加えた。タラゴナ調査から得られた重要な論点の一つは，再開発・再整備を手段として用いる都市計画と，遺跡や建造物の保存・修復を目的とする遺産保護政策の間に存在する，対立を孕んだ緊張関係にある。そこで，レウス調査では，一貫性のある都市再生ビジョンのもとで，都市計画と遺産保護政策を相互補完的な政策として両立させることが可能かどうかに焦点を当てることにした。調査研究の主な内容は，市・自治州の計画文書の入手・分析，都市計画担当助役・担当官へのインタビュー調査，再開発エリア等に関するフィールド調査である。それらにより，市政の政策立案･遂行プロセスを詳細に検討した。

(2) 歴史地区の空間利用

歴史地区の空間利用に関しては，買物・飲食とイベント・観光の 2 つの活動領域に重点を置いて分析した。これらは，歴史地区を生活の場とする市民と非日常の関心対象とする訪問者の双方が関わる活動である。ゆえに，都市の内と外に対する歴史地区の求心力を評価するという本研究の問題意識に照らして，適切な分析対象と考えられる。他方，地中海都市では，公共空間の利用のなかで屋外活動が大きな比重を占める。このことを考慮して，屋外活動の実態を季節・時間軸と交差させて把握し，空間利用分析の中心に位置づけることにした。屋外活動のあり方は気候条件や生活慣習に大きく規定されるので，すでに述べたタラゴナとレウスに加えて，地中海岸の観光都市として成長を遂げたカンブリルス，そして冬の寒さが厳しい中山間地域のファルセットを比較対象に加えることが積極的な意味をもつ。以上をふまえ，歴史地区の空間利用および次に述べる空間利用の仕組みについては，対象 4 都市に同程度の重みを置いて分析した。

(3) 空間利用を維持・促進する仕組み

歴史地区の空間利用は，地区内で日常を過ごす住民や小売や飲食などの事業者をはじめ，多様な主体の関心と利害の絡り合いのうえに成立している。そうした主体間関係をとらえるために，本研究では，住民組織や事業者組合が個別に進めている取組みと併せて，連携推進と利害調整に果たす行政の役割を重視した。とりわけ着眼点としたのは，2004 年以来，カタルーニャ自治州の多くの市が自治州の支援を得て，市民・事業者との協働で進めている「地区プログラム」である。本研究の対象 4 都市の歴史地区は，自治州による公募で地区プログラムの選定を受けており，事業開始の時期に照らして，一定の評価が可能な段階に達していると考えられる。そこで，市が編成したプログラム実施の司令塔組織とともに，市と協働する住民組織，事業者組合，アーティスト団体などへのインタビュー調査を行い，事業の成果を検証することにした。これらの団体は，歴史地区の空間利用に関して明確な問題意識を有する各分野の代表でもある。各々の利害関心を知り，多様な主体が交錯する歴史地区の空間利用を成立させている仕組みを洞察することが，一歩踏み込んだ目標となる。

4. 研究成果

本研究では，歴史地区における公共空間の協育を通じた地方都市再生の筋道について，3 つの角度から考察を進めてきた。以下では，各柱について得た知見の概略を述べたうえで，本研究全体の成果について，計画段階では必ずしも予想していなかった都市研究の新たな視角や研究実践の可能性にも言及しながら説明したい。

(1) 歴史都市の空間政策

古代遺跡の上に再建されたタラゴナでは，世界遺産に登録された考古遺跡群に代表される文化遺産が，市街地の広い範囲を覆う都市遺産としての性格を有している。これに対して，本研究で新たに分析対象としたレウスは，街道の交差点に成立した中世の商業集落を起源としており，中世市壁の部分的な遺構などを除けば，顕著な考古遺跡をもたない。レウスにおける文化遺産の主体は，近代の商業ブルジョワジーが建てたムダルニズマ（近代主義）様式の邸宅など，個別の建築遺産である。他方，中世の囲郭都市を起源とするコンパクトな歴史地区や放射状に延びる街道が象徴するように，都市の骨格を規定する先行形態は，市街地開発の波を受けながらも，比較的よく保たれている。さらに，かつて「カタルーニャ第二の都市」とされた商業都市としての繁栄が，今なお，レウスの都市アイデンティティの核をなす。

レウスの市政は，以上のような地理的コンテキストを支えとすることで，方向性の明確な空間政策を打ち出すことに成功してきた。とくに，商業空間としての歴史地区の活性化に重きを置きつつ，それを実現するための処方箋として，エリアによってクリアランス型の再開発と歴史的な建造環境の保全を選択的に組み合わせた点が注目される。レウスでは，遺産保護政策が都市計画と共通の部局によって策定されており，タラゴナでみられたような再整備と保存の対立･矛盾は生じていない。また，地下公共駐車場や市バス路線網の整備といったモビリティ政策も，歴史地区を核とするコンパクトシティの追求という空間政策の基本方針と整合し，それを補強する働きをしている。

もっとも，より大きなリージョナルスケールの視点にたつと，県都タラゴナは，行政・サービス機能の集積や豊富な文化遺産・観光資源を梃子として，以前にも増して影響力を強めている。商業機能においてすら商都レウスを凌駕しつつあるタラゴナに対して，レウスは積年の対抗意識に鼓舞されたイノヴェーティヴ志向の都市政策を続けている。しかし，安直な開発政策から距離を置きながら，一貫性のある政策を維持するのは容易でないと思われる。

(2) 歴史地区の空間利用

歴史地区の空間利用については，対象 4 都市すべてを対象として研究に取り掛ったが，新たな発見がとくに多く得られたのは，カンブリルスとファルセットの調査である。

観光化が進んだ地中海岸の小都市，カンブリルスの調査では，中心市街地の活力を支える小売・消費者サービスの事業者に焦点を当て，事業者の働きを通して界隈とよぶべき個性豊かな公共空間が形成される過程を分析した。そのさいには，内陸寄りの街道町として

成立した歴史地区と併せて，小規模な漁業集落から観光集落へ変容した港地区という，性格の異なる2つの歴史的な核を調査対象とした。各地区の中心エリアに絞ってインタビュー方式による事業者の悉皆調査を行った結果，交通アクセスや人口集中のみならず，建造環境の歴史性に凝縮された空間文脈を経営資源の一部として読み込み，同時に，都市空間に人々の交流を生み出すことで，界隈が有する個性の深化に寄与している事業者の働きが明らかになった。そうした知見は，空間と社会の弁証法というべき相互関係の重要な一翼が事業者によって担われていることを示すものと考える。

タラゴナ県中山間地域の小都市，ファルセットの調査は，街路・広場や公共性を有する施設全般を含む，広い概念としての共同利用空間に焦点を当てて実施した。ファルセットのように，財政力に乏しい小規模自治体では，市民セクターの主体的な関わりなしに，行政のみの力で空間の共同利用を維持することはできない。そうした観点から，拱廊・連絡通路等の都市計画上の位置づけ，公共施設の市民団体への貸付，祭り・イベント時の空間利用などについて，行政・各種団体へのインタビュー調査と綿密なフィールド記録にもとづく考察を行った。結果として，都市空間の共同利用を可能としている広義の制度の存在が浮き彫りとなり，なかでも，一部私有財産の公共利用への開放を含む社会的慣習のもつ重要性が明らかとなった。

(3) 空間利用を維持・促進する仕組み

空間利用を維持･促進する仕組みのなかで，本研究が計画段階から注目していたのは，カタルーニャ自治州の支援を受けて市が実施している「地区プログラム」である。各事例について，プログラムの計画書・実施報告書の分析，運営組織へのインタビュー調査，関係団体への聞取りを含むフィールド調査を行った結果，歴史地区の地理的マネジメントと言うべき興味深い都市政策の試みを見出すことができた。歴史地区の役割を地方都市再生の全体構想に位置づけるためには，各自治体の財政状況や計画体系との折り合いのなかから，歴史地区のポテンシャルを引き出すための最適解を見つけ出す知恵が必要である。そうした観点に照らすと，対象4都市の間でも，成功度には一定の隔たりが認められた。

本研究の中心対象と言うべきタラゴナとレウスについては，都市政策に関する個別のテーマを各々設定して，さらに考察を深めた。

古代ローマ時代のモニュメンタルな遺跡を多く有するタラゴナでは，毎年5月に開催される歴史再現（リイナクトメント）の大イベント，「タラコ・ビバ」に注目し，これを市民によるアイデンティティ探求行為の観点から分析した。そのために，会期中に参与観察的手法による調査と併せて，リイナクトメントの地元グループに対するインタビューを実施した。市の専門職員のステータスを有するディレクターを中心に，市民グループ，専門家，近隣自治体などとの協働によって続けられているタラコ・ビバは，舞台芸術の祭典ではなく，市民が自らの町の来歴を知り，表現する共同の演技として理解すべきというのが，得られた主な知見である。

レウスに関しては，民主化以来の社会党の長期政権が2011年に保守系ナショナリスト政権に交代したことに注目し，政権交代が都市政策の刷新に果たす役割について，都市計画マスタープランの練り直しに的を絞って考察した。そのさい，政権交代前後の都市計画担当助役への詳細なインタビューを調査の核に据えた。分析の結果，政権交代が起きたことで，不動産バブル期（1996～2008年）の発想を引き摺る拡大志向の開発政策からの決別が可能になったことが明らかになった。同時に，レウスの現政権がモビリティ政策を重視していることに表れるように，グローバル化が進む現代の都市は，たんなる時局変化への対応を超えて，フィジカルプランニングに重きを置く近代都市計画に特有の限界と向き合う時期に来ているという，都市政策の中長期的展望に関する示唆を得た。

(4) 総括と展望

以上に要約したように，本研究では，公共空間としての歴史地区の協育から地方都市再生の筋道を見通すという企図のもと，地理的コンテキストを異にするタラゴナ県の4都市の比較考察を通じて，多くの有益な知見を導き出すことに成功した。それらを改めて振り返るならば，都市の個性は，たんなる物的な環境ではなく，都市と人の関わり，そして関わりを共有する人々の繋がりの交点に立ち現われるという，単純ではあるが重要な事実認識に集約される。世界中の都市を互いに似たり寄ったりの平俗な存在へ貶めそうなグローバルフローの働きを前に，押し寄せる波からアイデアや活力を吸収しつつ，自らの個性を深化させるには，何よりも，希薄化した都市と人のコミュニケーションを活性化させることが必要である。研究が進むにつれて，考古遺跡，建築物，街路･広場，共同施設，祭り･イベントなど，調査対象とした多様な事物について，都市と人のコミュニケーションを支えるメディアとして再評価すべきとの考えに至った。

都市の個性を価値化し，多くの人々の手で継承・進化させるために，地理学が主体的に果たしうる役割は何だろうか。次の科研費研究課題では，都市と人のコミュニケーションを主題として，地理学から計画論への橋渡しとなる研究実践を試みることを構想している。そのさいには，日本国内のフィールドに足場をもちながら，地中海ヨーロッパでの研究蓄積をいかして，方法論の検証と鍛錬を目

的とする国際学術交流を推進したい。

5.　主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 19 件）

① TAKENAKA, Katsuyuki, “Managing critical moments in urban politics: Discussion on the future Urban Planning in Reus, Catalonia”. *Mediterranean World*, XXIII, 2017, pp.201-222〔査読無〕。
https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/28547/1/chichukai0002302010.pdf

② TAKENAKA, Katsuyuki, “Imaginari col·lectiu de la ciutat de Càller a través del paisatge viscut a les cantonades”『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第 18 号，2017，pp.123-144〔査読無〕。

③竹中克行「都市と人のコミュニケーション―地中海都市から考える①～⑥」『Architect』2016 年 8 月～ 2017 年 6 月（隔月連載 6 回），pp.4-5（各回とも）〔査読無〕。

④竹中克行「事業者がつくる界隈―地中海都市カンブリルスの歴史地区と港地区」『都市地理学』Vol. 11，2016，pp.23-43〔査読有〕。

⑤竹中克行・金原彩音「アートから考える名古屋・中川運河再生の可能性」『地理学報告』第 118 号，2016，pp.1-16〔査読無〕。

⑥ TAKENAKA, Katsuyuki, “Entrepreneurs networking in the contemporary Mediterranean: Field survey in a Catalan Coastal Town, Cambrils”. *Mediterranean World*, XXII, 2015, pp.65-77〔査読無〕。
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/28565/1/chichukai0002200650.pdf

⑦森田幸作・小井戸梨沙・松本留依・竹中克行「大学生の生活行動から考える都市のコンパクト性―サンティアゴ・デ・コンポステラ（スペイン）を題材に」『地理学報告』第 117 号，2015，pp.31-44〔査読無〕。
https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=3928&file_id=15&file_no=1

⑧竹中克行「広場に集まる―風土を読み込む人と空間の作法」『Re』185 号，2015，pp.7-12〔査読無〕。

⑨ TAKENAKA, Katsuyuki, “Participation in Landscape and Local Knowledge: Priorat, Agricultural Landscape of the Mediterranean Mountains”. Doo-Chul, Kim et al. eds.: *Globalization and New Challenges of Agricultural and Rural Systems*. IGU Commission on the Sustainability of Rural Systems / Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, 2015, pp.12-19〔査読有〕。

⑩竹中克行「不動産バブル崩壊後のスペイン都市―地中海のコンパクトシティの復権にむけて」『歴史と地理』第 673 号，2014，pp.32-42〔査読無〕。

⑪竹中克行「変化に介在する『地理』―編集されつづける地中海都市カンブリルスのかたち」『JunCture』第 4 号，2013, pp.14-29〔査読無〕。

⑫竹中克行「サンティアゴ・デ・コンポステラ―交錯する歴史地区の知覚表象」『都市地理学』Vol. 8, 2013, pp.68-81〔査読有〕。

⑬竹中克行「カタルーニャ自治州の『地区プログラム』における歴史地区の地理的マネジメント――タラゴナ県 4 都市の比較分析」『地理学報告』第 115 号，2013，pp.47-58〔査読無〕。
https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=3946&file_id=15&file_no=1

⑭ TAKENAKA, Katsuyuki: “Recuperación del núcleo histórico de Reus como espacio de centralidad”. *Mediterranean World*, XXI. 2012, pp.89-112〔査読無〕。
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/26453/1/chichukai0002100890.pdf

⑮竹中克行「スペインの地理学―アカデミック地理と職業地理の実りある関係」『地学雑誌』121 巻 4 号，2012，pp.650-663〔査読有〕。
DOI: 10.5026/jgeography.121.650

⑯竹中克行「地中海都市の衰退地区再生―スペイン・カタルーニャの『地区プログラム』が推進するパートナーシップの都市政策」小林浩二・大関泰宏編著『拡大 EU とニューリージョン』原書房，2012 年，pp.133-144〔査読無〕。

⑰竹中克行「地中海都市カリアリから考える「普通」の町の再生①～⑱」『地理』2012 年 4 月～ 2013 年 9 月（連載 18 回），各 8p.〔査読無〕。

〔学会発表〕（計 23 件）

①竹中克行「政権交代による都市計画マスタープランの方針転換―レウス（カタルーニャ）の経験から」日本地理学会大会，2017 年 3 月 28 日，筑波大学（茨城県つくば市）。

② TAKENAKA, Katsuyuki, “Tangible and intangible context of the city as a mediator of change: Research experience between Iberia and Japan”, Colóquio: *Relações entre a Península Ibérica e o Japão: do século XVI aos dias de hoje*. March 7, 2017, Universidade do Minho, Braga (Portugal).

③竹中克行・金原彩音「アートから考える中川運河再生の可能性」中部都市学会研究会，2016 年 7 月 30 日，愛知県産業労働セン

ター（名古屋市）。

④ TAKENAKA, Katsuyuki: “Entrepreneurs building neighbourhood: A case study from a Catalan coastal town, Cambrils". Colloquium co-organized by the Mediterranean Studies Group, Ionian University and Region of the Ionian Islands: *Crises and Networks in the Mediterranean World II: History, Society and Literature*, March 28, 2016, Corfu (Greece).

⑤竹中克行「都市の多生―中川運河・空間コード研究から考える」日本建築家協会東海支部大会「都市の多生―名古屋のなりたち・これから」，2015 年 11 月 13 日，名古屋テレビ塔（名古屋市）。

⑥長谷川泰洋・橋本啓史・嶌村渉・竹中克行「低利用化した産業空間における自然生えの生物多様性・生態系サービス―名古屋市中川運河の事例」日本造園学会中部支部大会，2015 年 10 月 25 日，名古屋市立大学北千種キャンパス（名古屋市）。

⑦竹中克行「名古屋・中川運河の空間コード研究」中部都市学会研究会，2015 年 8 月 1 日, 愛知県産業労働センター (名古屋市)。

⑧ TAKENAKA, Katsuyuki: “Santiago de Compostela as a city of flows: From the field research of the Laboratory Takenaka of Geography, Aichi Prefectural University: 2012-2014”. Ciclo de Conferencias Vía Láctea, March 6, 2015, Universidade de Santiago de Compostela, Lugo (Spain).

⑨竹中克行「中川運河・空間コード研究―『「らしさ』のある都市づくりにむけて」平成 26 年度第 1 回中川運河再生プラットフォーム，2015 年 2 月 20 日，名古屋都市センター（名古屋市）。

⑩長谷川泰洋・橋本啓史・嶌村渉・竹中克行「都市における河川・運河の文化的サービス―名古屋市の事例」日本造園学会中部支部大会，2014 年 11 月 23 日，サンホール　マツシロ（長野県松代町）。

⑪ TAKENAKA, Katsuyuki: “Entrepreneurs Networking in Crisis: A Case Study from a Catalan Coastal Town, Cambrils”. Workshop co-organized by the Mediterranean Studies Group and l’Institut Universitaire de la Recherche Scientifique (Université Mohammed V): *Crises and Networks in the Mediterranean World*, September 5, 2014, Rabat (Morocco).

⑫竹中克行「中川運河の空間コードを発見する」中川運河再生シンポジウム 2014「中川運河の過去，今，そして未来へと紡ぐ物語」2014 年 2 月 11 日，中川区文化小劇場（名古屋市）。

⑬ TAKENAKA, Katsuyuki: “Reproducing Urban Morphology in the Mediterranean: A Case from a Catalan Town, Cambrils”. Regional Conference of the International Geographical Union, August 5, 2013. Kyoto International Conference Center（京都市）。

⑭ TAKENAKA, Katsuyuki: “Legibility of landscape and local knowledge: Priorat, Agricultural Landscape of the Mediterranean Mountains”. International Geographical Union. Commission on the Sustainability of Rural Systems. 21st Annual Colloquium, July 29-August 4, 2013（ポスター発表），名古屋大学（名古屋市）。

⑮竹中克行「レウス（スペイン）歴史地区の中心性回復―商業都市としての先行形態の発展的継承」人文地理学会大会，2012 年 11 月 18 日，立命館大学（京都市）。

〔図書〕（計 9 件）

①竹中克行編著『空間コードから共創する中川運河―「らしさ」のある都市づくり』鹿島出版会，2016，224p.

②竹中克行編著『グローバル化と文化の境界―多様性をマネジメントするヨーロッパの挑戦』昭和堂，2015，250p.

③竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房，2015，307p.

④竹中克行「カタルーニャに息づく地域の表情」立石博高・奥野良知編『カタルーニャを知るための 50 章』明石書店，2013，pp.69-101.

⑤ムニョス，フランセスク著／竹中克行・笹野益生訳『俗都市化―ありふれた景観　グローバルな場所』昭和堂，2013，309p.

〔その他〕

研究教育実践に関する Web サイト
http://takenaka-lab.net/

6.　研究組織

(1) 研究代表者
竹中　克行（TAKENAKA, Katsuyuki）
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号：90305508

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし

(4) 研究協力者
なし